

カレーかハヤシか

ふじもり夏香

〈登場人物〉

高坂涼子（こうさかりようこ）	50歳	専業主婦
中川真奈美（なかがわまなみ）	25歳	OL

（あらすじ）

上司の高坂の妻に招かれて、高坂家を訪れた真奈美。高坂はあいにく留守だったが妻の涼子に歓迎され、二人でおしゃべりしながら待つことに。

やがて、先にランチにしようということになり、料理自慢の涼子が夫との思い出があるカレーライスとハヤシライスを作ったが、どちらを食べたいかと問われる。しかし、それは思いもよらない重い選択だった。

とある休日の昼近く、高坂家のダイニング。テーブルの上には、コップや、紙ナプキンに包んだスプーンが置かれている。玄関から、高坂涼子と中川真奈美が入ってくる。

涼子 さあ、どうぞどうぞ。うれしいわ、真奈美さんとゆっくりお話しできるなんて。

真奈美 私の方こそ、高坂部長の奥様にお招きいただけるとは、光栄です。

涼子 まあ、光栄だなんて。なんにもお構いできないのよ。ちょっと、ランチでも一緒にできればなんて思ってたね。

真奈美 ありがとうございます。あ、そうだ、これ、お口に合うかどうか。(と、ケーキの箱を差し出す)

涼子 まあ、これ、今評判のお店じゃない。さすがねえ。じゃあ、デザートにいただきますでしょうか。……まあ、食べられたらだけどね。

真奈美 え？あ、だって、おなか一杯になっちゃうかなと思って。そうですね。でも、ほら、デザートは別腹って言うから。

涼子 フフフ。あ、どうぞ(と、椅子を勧める) ありがとうございます。(と、腰かける)

真奈美 (自分も腰かけながら) そうだ、せっかく真奈美さんが来てくださったのに、主人たら、休日出勤なんですって。

涼子 そうですか。あら、知らなかった？

真奈美 え？ 同じ部署なら、知ってるかと思った。

涼子 そう言えば、そうだったかも。すみません、ダメな部下で。何言ってるの。まあ、そのうち帰ってくるでしょうから、おしゃべりしてましよう。ずっと、うちにいると、おしゃべりの相手がいなくてね。

真奈美 はい、私なんかがお相手で良ければ。あなたとおしゃべりしたいの。ねえねえ、女同士だと、恋バナとかするんですよ、こういう時。

涼子 ハハハ、そうですね。ズバリ、あなた、お付き合いしてる人はいるの？

真奈美 え？いいえ、いません、そんな人。ほんと？まあ、こんなきれいなのに？じゃあ、どんな人がタイプなの？

涼子 そ、そうですね。・私より年下で、童顔で、いかにも文科系って感じの人かな。

真奈美 まあ、うちの主人と全く逆ね。フフフ

涼子 あ、そうですね。ハハハ

真奈美 私はね、主人しか付き合ったことがないのよ。今時、信じられないでしょ。だから、思い出も、主人とばかり。

真奈美

そうですか

涼子

初めてのデートは、銀座。映画を見た後、れんが軒でね、ハヤシライスを食べたのよ。まだ、二人とも、学生だったから、お金が無くてね、映画代をはらったら、ハヤシライスを一っしか頼めなかった。お店の人が気をきかせて、取り皿を持ってきてくれたけど、ウフ、一つのお皿から、二人で食べちゃった。

真奈美

涼子

彼に初めて、作ってあげたのは、カレーライス。私、料理なんて全然やってこなくて、びっくりするほどまずいカレー作っちゃった。でも、彼、おいしいよって、全部食べてくれたの。それから、私、すごく研究して、今では少しお料理上手になったのよ。

真奈美

涼子

奥様のお料理上手なことは、会社でも、評判です。まあ、いやね、はずかしいわ。

真奈美

涼子

調理師の免許も持ってらっしゃるとか。まあ、あの人、そんなこと、話してるの。実はね、私、調子に乗っちゃって、今度はフグ調理師の資格もとるつもりで勉強中なの。

真奈美

涼子

資格がとれたら、ごちそうしましょうか？

真奈美

涼子

え？あ、そうですね。楽しみ。あら、表情がこわばったわよ。安心して、今日のメニューは、カレーライスとハヤシライスにしたの。うふふ、思い出の。あなたは、どちらが好き？

真奈美

涼子

そうですね、どちらも好きです。そう、良かった。主人もね、両方好きなんですって。欲張りよね。両方、一緒に食べたいっていうのよ。でも、それじゃあ、それぞれの美味しさを殺してしまうのよ。優柔不断なのね。

真奈美

涼子

優柔不断な人は、選ばれなかった方（ほう）を捨てることができない優しい人だって聞いたことがありますよ。

真奈美

涼子

そう、確かに、やさしいわよね。ほんと、あの人、とってもやさしいの。そうですね。

真奈美

涼子

やっぱり、あなたにもやさしい？

真奈美

涼子

え？いや、あの、会社でも優しい上司だねって評判ですよ。そう。でも、その優しさが、両方を不幸にするってことに気付いてないのよ。

真奈美

涼子

え？  
（間）実は・・・主人ね、不倫してるのよ。

真奈美

涼子

えっ！  
わざわざ、防水の、新しいスマホにして、お風呂まで持って入るのよ。出張も、一日ずつ長くなってるの。休日出勤も増えたし。

真奈美

涼子

いや、それは、お仕事がお忙しいからじゃないですか。

涼子 私も、はじめはそうかかって思ってた。でもね、ほら、芸能人の不倫問題

で、LINEはわりと簡単にのぞけるって話をラジオでやってたのよ。

真奈美 え、え？そんなんですか？

涼子 ええ。そういうところ、あの人、抜けてるから。古いスマホは引き出しに入

れっぱなしなの。ちょっと操作すれば、のぞけちゃうのよ。まあ、相手の  
本名まではわからないんだけどね。あなた、知ってた？

真奈美 え？・・・いいえ。

涼子 (時計を見て) あら、もうこんな時間。先に食べちゃいませうか。

真奈美 いいえ、お待ちしますよ。

涼子 いいじゃない、先に食べましようよ。

と、涼子、台所に立つ。真奈美、急いで、スマホを取り出し、操作する  
が、涼子の気配を感じて、スマホをしまう。涼子、カレーライスとハヤ  
シライスの皿を持って登場。

涼子 カレーライスとハヤシライスを一ずつ持って来たわ。どっちがいい？

真奈美 えーと、そうですね・・・どっちも、おいしそうですね。

涼子 ええ、両方とも、かなりこだわってるのよ。

真奈美 やっぱり、両方、いただきたくありませんね。

涼子 それじゃ、だめよ。どちらかを選ぶという覚悟を持たないとね。

真奈美 はあ。

涼子 私ね、いつか、主人の不倫相手をよんで、運試しをするつもりなの。

真奈美 運試し？

涼子 そう、私と彼女、どちらがあの人の妻にふさわしいか、天の采配を仰ぐつ  
もり。

真奈美 どういうことですか？

涼子 どちらかに毒を入れたカレーライスとハヤシライスを目の前に並べて選ば  
せるつもりなの。ほら、こんな風に(と、皿を、真奈美の前に並べる)

真奈美 ・ ・ ・

涼子 選ばなかった方は、私が食べるのよ。もし、私の方が毒入りなら、あの人  
も、このうちも、彼女のもの。まあ、彼女が、毒入りを引いてしまったら、  
ゲームオーバーだけどね。

真奈美 そんな、おそろしい・・・

涼子 そうかしら？ねえ、あなただったら、どっちを選ぶ？

真奈美 えっ、えっ、えっ

涼子 なに、あわてるの、あなたは彼の相手じゃないでしょ。

真奈美 は、はい。

涼子 じゃあ、大丈夫でしょ。ねえ、どっちにする？あなたが選ばなかった方を、  
私が食べるわ。

真奈美 え、えーと、

涼子 さあ、選んで。

真奈美 えーと、さ、最初のデートで食べたのが、ハヤシライスで、初めて作ったのがカレーライスですよ。結局、どっちの印象が強いんですか？

涼子 さあ、どうでしょう？

真奈美 ・・・

涼子 いやね、どうしてそんなに緊張してるの？

真奈美 だって・・・

涼子 私が言ったのは、主人の不倫相手の話よ。あなたじゃないんですよ。

真奈美 ええ、もちろん。

涼子 だったら、そんな怖い顔しなくてもいいじゃない。わたしは、ただ、カレーとハヤシ、どっちを食べる？って言うだけなんだから。

真奈美 そ、そうですね。

涼子 いいわ、3つだけ質問に答えてあげる。ハイ、イイエで答えられる質問よ。

真奈美 えーと。あのー、初デートがハヤシライスで、初めて作ったのがカレーライスですよ。

涼子 ええ。それが質問？

真奈美 いいえ。えーと、思い出深いのは、やっぱり、手作りしたカレーですか？

涼子 うーん、まあ、そうですね、ハイ。次は？

真奈美 えーと、えーと、だけど、あ、毒を入れるのは、カレーですか？

涼子 直球できたわね。うーん・・・どうしようかな。そうね、イイエかな。

真奈美 ・・・(涼子の表情をうかがう)

涼子 さあ、最後の質問よ。

真奈美 えーと、えーと、えーと・・・、あの、本当は、ご主人の相手が誰だかわかってるんじゃないですか？

涼子 フフフ。(うなづく)

真奈美 ホントに？

涼子 ええ。かなり前のLINEのトークに二人の写真がのってたわ。きれいに写ってたわよ、あなた。

真奈美 (ため息)

涼子 さあ、質問はおわり。どちらか選んでちょうだい。素直にカレーにする？

真奈美 え、あの、こんなこと、やめましょうよ。

涼子 何言ってるの。あなた、あの人のこと、愛してないの？私は愛してるわ。

真奈美 だから、命をかけられるの。

真奈美 ・・・

涼子 あなた、遊びだったの？遊びで人の夫を奪ったの？

真奈美 そんな、そんなつもりじゃ・・・

涼子 あなたが勝ったら、私は消えるのよ。主人と幸せにくらせばいいわ。そのくらいの勝負もできないで、ほんの軽い気持ちで、私のすべてを奪ったの？

真奈美 そんな。いいえ、私も真剣にあの人のことをあ、愛しています！

涼子 はつきり言ってくれてありがとう。私は、もう、覚悟ができてるから。も

し、私が死んだら、あの人に、覚悟の自殺だったと話してね。遺書は2階のパソコンの中よ。

真奈美

涼子

（かなり感情的に）さあ、選びなさい！どっちにするの！カレーでいいかしら？いい？同時に食べるのよ！ほら、スプーンを持って！あなたも、ぬけぬけと、人の旦那を愛してるって言うなら、そのくらいの覚悟はできるでしょ！

真奈美

涼子

ちよ、ちよっと待って・・・  
まだ、決められないの。本当に愛してるの？わかったわ、一度だけ、変更するチャンスあげる。どうする？ハヤシにするの？

真奈美

涼子

じゃあ、カレーでいいのね。さあ、同時に食べるのよ！  
待って！やっぱりハヤシにする！

真奈美

涼子

（大きく息を吐いて、弱弱しく）わかった。ねえ、私が死んだら、主人のこと、よろしくね。ああ見えて、風邪をひきやすい人だから、気をつけてあげてね。

真奈美

涼子

・・・（うなづく）  
じゃあ、同時に食べましょう。

張り詰めた空気。涼子、紙ナプキンをはずし、スプーンを持つ。真奈美にもそうするよう目で促す。見つめ合う、二人。

涼子

真奈美

さあ、いくわよ。あなた、愛してるわ・・・

部長・・・

二人、同時に、スプーンを口に運ぶ。しばらくの沈黙。突然、真奈美が苦しみ出す。

真奈美

やっぱり、カレーだったの？（バタツと倒れる）

涼子、真奈美を見下ろしながら

涼子

バカね、毒は最初からスプーンに塗ってあったのよ。

（完）